

学会発表を模した「プレゼンテーション経験」授業

教育学部 特別支援教育講座 中野 広輔

1. 授業の概要

この授業は前学期に開講している2単位の授業で、対象は特別支援教育専攻（発達障害）の大学院生である（本年度受講は7人）。大学院生のほとんどは特別支援教育に携わる現職教員であり、発達障害児の医療的知識が欠かせない。習得すべき内容は発達障害を呈する原因疾患、疫学、病態生理、基礎脳科学、診断法、医療現場に必要な検査、薬物および非薬物的治療法、疾患・障害予後、と多岐にわたる。そしてその知識を教育現場における支援に利用できるように習得することがこの授業を受講する目的である。

2. 授業研究：

① 授業研究内容

能動的学習の促進を目的として、授業の初期段階で、あらかじめテーマに沿って学会発表形式でプレゼンテーションを一人一人行うことをアナウンスした。そして準備期間を確保するため、初回から3回までは講義形式による基礎知識の教授を目的とした座学を実施した。第4回からは「第1回文京町知的障害研究会」と学会・研究会を模した形式で、あらかじめ決めてあった個別テーマ（例：知的障害の原因、ダウン症候群の特徴、など）について10分間の発表と10分間のディスカッションを設けた。

世代的に大学生の時代にはパワーポイントの経験が皆無のため、ソフトを操作する段階から困難を訴える院生が多かった。また、出典の明記、文献の収集、効果的な表現法など、回を重ねるごとにプレゼンテーション技術が向上していった。

② 授業時間外学習の促進について

上記のように、各自に設定されたテーマについてプレゼンテーションをする授業のため、情報収集、文献検索、パワーポイントによる準備など、かなりの授業時間外学習を要する内容となった。およそ2～3週に1回程度順番が回るサイクルを設定していたが、初期の不慣れな段階では時間が足りないという意見も聞かれた。

③ アンケート結果

アンケートは最終授業時に実施し、大きく3項目における自由記載形式とした。その3項目とは

(1) 本授業における良かった点

(2) 本授業において改善すべき点

(3) 後学期に開講する「行動上の問題への対応」という授業に望む内容

である。

受講人数が7人と少人数かつ全員が特別支援教育の現職教員という類似した立場であるため、自由記載にしたものの記載内容はほぼ同様な内容であった。以下、個別に記す。

(1) 本授業における良かった点

ほぼ全員が「薬物治療の知識や脳科学の最新知識が理解できてよかった」という意見と、「学会発表形式のプレゼンテーションが貴重な経験になった」という意見を記載していた。

(2) 本授業において改善すべき点

教員に対してご自身の立場を気にしてしまったのか無難な意見、というよりほとんど「ありません」という意見が大半を占めた。

その中でも「座学講義の時に紙媒体資料が欲しかった」という意見が散見された。

(3) 「行動上の問題への対応」の授業に望むこと

ほぼ全員が「学校現場で具体的に役立つ手法の習得」を挙げていた。

3. 総括

プレゼンテーションを課する形式とした理由は

- ・大学院生という「研究者」であることを意識させ、文献検索やプレゼンテーションについて経験を積むため

- ・最後に修士論文発表会を控える立場にも関わらず世代的にほとんどの院生がパワーポイント操作の経験がなく、前学期の初期から扱い慣れてもらうため。

- ・自身による発表形式とすることにより、単に能動的な学習を促進するだけでなく、自分自身の経験や今後の自分のキャリア形成と結び付けて考えをまとめて伝えることが可能になる。そして同じ立場の他の院生と討論することにより相互の学習が発展するという予測があったため。

という3点である。

受講者のほぼ全員が10～20年の教員経験を有する現職教員であり、経験に基づく知識は授業前から一定レベルを保持していた。プレゼンテーション形式の授業にすることにより自分の職業や経験と照らし合わせた考察や情報収集した内容を適切に他者に伝える手法の研鑽となり得た。

中野の役割としては、テーマ設定や各自のテーマの割り振り、プレゼンテーション時の司会進行、ディスカッションの促進、補足事項の解説や誤った内容に対する訂正などであった。制限時間を超過する発表が連続した際の是正や、討論時間の不足などが授業マネジメントにおいて苦勞した点である。

必然的に授業時間外学習は必須であり十分促された印象である。今後も継続したい形式

ではあるが、テーマ設定や発表準備にかかる負荷について、院生同士の不公平感や労力過多にならないようこれからも留意していく必要がある。